

# 論文を投稿するにあたっての注意点

## －「事例報告」を例に－

日本診療情報管理学会会誌 編集委員  
札幌社会保険総合病院 医療情報管理室

佐藤 正 幸

### 1. はじめに

日本診療情報管理学会会誌（以下、学会誌）は、会員から投稿された論文で成り立っている。全国の会員が、投稿者の行った工夫や改善、調査・分析、システム構築などの成果を共有する手段でもある。そして、学術誌としての学会誌が、高く評価されることは、会員の社会的地位の向上にも繋がる。そのためにも、論文の質は、一定のレベルを維持する必要がある。日本診療情報管理学会が、会誌「診療情報管理」投稿規程<sup>1)</sup>を定める所以でもある。

投稿された論文は、編集委員や査読協力が、投稿規程に則り、査読を行う。そして、査読された論文は、修正・加筆されて投稿者のもとに戻されるのが普通である。投稿者は、ここで挫けず、さらに頑張り努力を重ねて、再投稿することを査読者として望んでいる。

編集委員会では、投稿規程を補足するために、学会誌 Vol.17-1の「論文をまとめるにあたって」<sup>2)</sup>を皮切りに、「論文を投稿するにあたっての注意点」<sup>3-7)</sup>をシリーズで、過去6回、学会誌に掲載している。さらに、昨年は、「診療情報管理士生涯教育研修会」<sup>8)</sup>においても講演されている。

本稿では、投稿論文の中でも多い「事例報告」を例に、論文の構成に沿って解説をする。

### 2. 論文の構成と記述

「事例報告」の論文構成は、概ね「目的」、「対象および方法」、「結果（成績）」、「考察」、「結語」からなる。これは、読者が読んで読みやすい、理解しやすい構成であり、論理的な流れに自然に沿うように考えられている。

#### 1) 「目的」

「目的」では、報告する事例の位置を定義する。なぜ、問題の解決に取り組まなければいけなかったのか。問題の発生した背景と取り組むに至った経緯を書き、今回、取り組んだ問題とその目的、方向性を明確にする。また、先行する研究や他に同種の報告があれば、これを引用して、現在、自分たちが抱えている問題や状況を、比較して説明する。読者は、比較されることで、さらに論文の位置を明確にすることができる。

査読論文例では、自施設が属する法人の設立目的や規模を詳細に書いたものがあつた。問題の発生した背景として、また、解決のための条件として必要な説明なのか、具体的に吟味して調査および研究計画を立案し、実施した結果を考察して論文を書いたいただきたい。そして「目的」は、「結果」や「考察」に繋がっていく内容であり、「結果」や「考察」を書いた後に整合性を図って「目的」を書き直すことも必要である。

#### 2) 「対象および方法」

「対象および方法」では、発生した問題の要因を洗い出すために、どのようなデータを収集したか、どのようにして求めたか。検討対象とした具体的な年齢、性別、職種、傷病名など収集したデータの項目や数値、収集した期間や調査方法、そして収集したデータの分析方法や評価基準などを記述する。

また、すでに問題の要因が明らかになっている場合は、これを取り除くために実践した解決方法や設定した条件を記載する。例えば、解決のための段取りに使用したラベルやバインダー、書架などの事務備品があれば、その利用方法も併せて書かなければならない。解決方法としてシステムを構築した場合は、コンピューター、プリンターなどの機器構成や

プログラム作成のために考慮した要件などを具体的に書く必要がある。さらに、問題の再発を防止するために組織された体制や手順、条件などがあれば詳しく記述する。

科学的な実験研究の場合には、「実験方法」を参照することで、同一の実験が再現され、検証できなければならない。「事例報告」においても、「方法」を参照して、再現できることが望ましいのは言うまでもない。そのため、「方法」の記述は、順序立てられた記述が求められることになる。

しかし、順序立てられた記述であっても、自施設内で使用している箇条書きの運用手順が、解説もなく、そのまま投稿された論文も見られたので注意してほしい。確かに、投稿論文には文字数制限があるが、運用の背景がわからない読者には、適切な説明がなければ意味が通じないし、理解もできない。

### 3) 「結果」

「結果」は、客観的、かつ正確に、「方法」から導き出されたデータや分析結果、または、新しく発見された事実を書くことが重要である。ただし、得られたデータすべてを書く必要はない。基本的には「考察」、そして「結語」を結ぶために必要最小限度のデータが書かれていれば論文としての価値は認められる。

また、図表は読者の理解度を増すために有用である。しかし、図や表を作成するソフトの作図および作表機能が十分とは考えられない。ソフトから作り出されたものを、そのまま使用するのではなく、「直感的に理解できる」という図表のメリットを生かすために、ひと工夫加えることも大切である。

査読論文例では、表の項目欄と結果欄の区別を明示するためと思われるが、それぞれに異なる字体を用いた例があったが、却って判読し難いものであった。図表が出来上がったら、図表全体を俯瞰して、バランスと見易さの確認をすることが重要である。

### 4) 「考察」

「考察」は「結果」から得られた知見あるいは見解について、文献的な考察を加えて書くことが大切である。

問題解決のために実践した方法や仮定した目的が適切であったかを検証して、研究や調査の手順や妥当性を評価することが、論文の核心となる。特に、実践した方法から目的とする成果が見いだせない場

合は、乖離の程度の評価が大切である。また、得られた知見や見解は、一般的か、特異的か、他施設における有用性について評価することが必須事項である。他施設から同種の報告があれば、その現状を調査して比較することは非常に有益である。さらに、先行する研究と比較して優位性はあるか、独創性や新規性はあるかを評価して論述する。

「考察」は、なぜ、この事例が報告されるのか、そして、報告するに値することを読者に説明することでもある。当然、否定的な意見に対する説明も、ここに記載することになる。

査読論文例において、「方法」として具体的に実施していない方法や、調査した条件から得たデータで実施していない資料を用いたり、文献で例示されていない引用を用いて考察されている例なども散見されたので注意して頂きたい。また、研究や調査の評価は、抽象的であったり、あるいは定性的な記述に偏らずに、可能な範囲で具体的で、さらに定量的なデータで示さなければならない。

### 5) 「結語」

「結語」は、論文全体の要約と「考察」の中で導き出された結論を簡潔明瞭に記述する。当然、検討した問題すべてに解決が得られることが最良であるが、解決に至らず、将来の研究や調査が必要となる事例も少なくない。その場合には、残された課題や今後の展望を、次の研究の糸口として将来展望としてまとめることも「結語」には必要である。そして、調査や研究への協力者に対する感謝を込めて謝辞を記載することを忘れてはならない。

以上、論文の構成に沿って解説を行った。

## 3. まとめ

「事例報告」は、自施設内に発生した問題を解決したり、もしくは、取り組んだ業務改善の結果や、調査した結果の報告として記載される。そのため、問題発生から解決に向けた一連の流れが、時間軸に沿った形で、「目的」から「結語」までの論文構成として書かれることになる。これは形式として、一見論理的に見える論文であっても、内容は、飛躍的であったり、自己完結的であり、客観的、論理的でない場合がある。

多くの本学会会員にとって、論文投稿は、縁遠いものと考えられているかもしれないが、いざ、論文

の執筆に向う場合になったら、思いつくことを忘れてはならないと、勢いに任せて紙にペンを走らせていたという会員も多いと想像している。

論文執筆は、「起承転結」に習い、構成に従い項目毎に記述しながら、全体を俯瞰しながら客観的な視点で読み返して、論理的に一貫性を持った論文を完成させる努力が大切になる。

#### 4. 結語

主語や述語により構成された基本的な文章の書き方や、専門用語および略語の使い方や用語の統一に注意して書くことは、論文作成の基本である。投稿した論文が、読者に理解してもらえることを念頭に、「論文を投稿するにあたっての注意点」シリーズを、再読いただき、会員の地位向上のために、奮って投稿して頂く事を願って、本稿を終わります。

#### 参 考 文 献

- 1) 日本診療情報管理学会『研究論文投稿における倫理規程』及び会誌『診療情報管理』投稿規程.
- 2) 原 臣司：論文をまとめるにあたって. 診療録管理. 17(1)：51-53. 2005.
- 3) 信川益明：論文を投稿するにあたっての注意点. 診療録管理. 18(1)：83-87. 2006.
- 4) 入江真行：論文を投稿するにあたっての注意点－図・表の取扱い－. 診療録管理. 18(3)：90-91. 2006.
- 5) 渡邊一平：論文を投稿するにあたっての注意点－論文の種類－. 診療録管理. 19(1)：93-94. 2007.
- 6) 入江真行：論文を投稿するにあたっての注意点－査読について－. 診療録管理. 20(3)：91-93. 2009.
- 7) 小坂清美：論文を投稿するにあたっての注意点－論文の文章について－. 診療情報管理. 21(1)：92-93. 2009.
- 8) 鈴木莊太郎：論文を投稿するにあたっての注意点. 第42回診療情報管理士生涯教育研修会ランチョンセミナー講演抄録. 2009.

